

後漢書西域伝の閻膏珍について

吉池孝一

1. はじめに

『後漢書』西域伝に、インド西北に興ったクシャン（貴霜）朝の記述がある。それによると丘就卻（くじゅかく。クジュラ・カドフィセス）の子は閻膏珍（えんこうちん）とある。これまで、この閻膏珍はヴィマ・カドフィセスとされ、カニシカ王に至る王統は、クジュラ・カドフィセス→ヴィマ・カドフィセス→カニシカとされてきた。しかし、1993年に北アフガニスタンのラバータクでギリシア文字バクトリア語によるカニシカ王の碑文が発見され、碑文の読解の成果は、Sims-Williams, N. & J. Cribb (1996)によって公表された。それによると、クジュラ・カドフィセスとヴィマ・カドフィセスの間にヴィマ・タクトゥがおり、カニシカからみて、クジュラ・カドフィセス（曾祖父）、ヴィマ・タクトゥ（祖父）、ヴィマ・カドフィセス（父）であることが判明した。これを受けて、『後漢書』西域伝の閻膏珍が誰を指すかが問題となっている。閻膏珍をヴィマ・カドフィセスとしたまま『後漢書』西域伝の記述を補正する説と、閻膏珍をヴィマ・タクトゥとする説がある。いずれにしても、閻膏珍という漢字音写（漢語中古音の直前の音を表す）が、ヴィマ・カドフィセスとヴィマ・タクトゥのいずれにふさわしいかを検討することが議論の出発点となるが、それは軽視されているように見える。本稿は、漢字音写の形よりみて閻膏珍はヴィマ・カドフィセスの名前の音写であるとし、その観点より、『後漢書』西域伝に何らかの補正を加える必要があることを述べる。

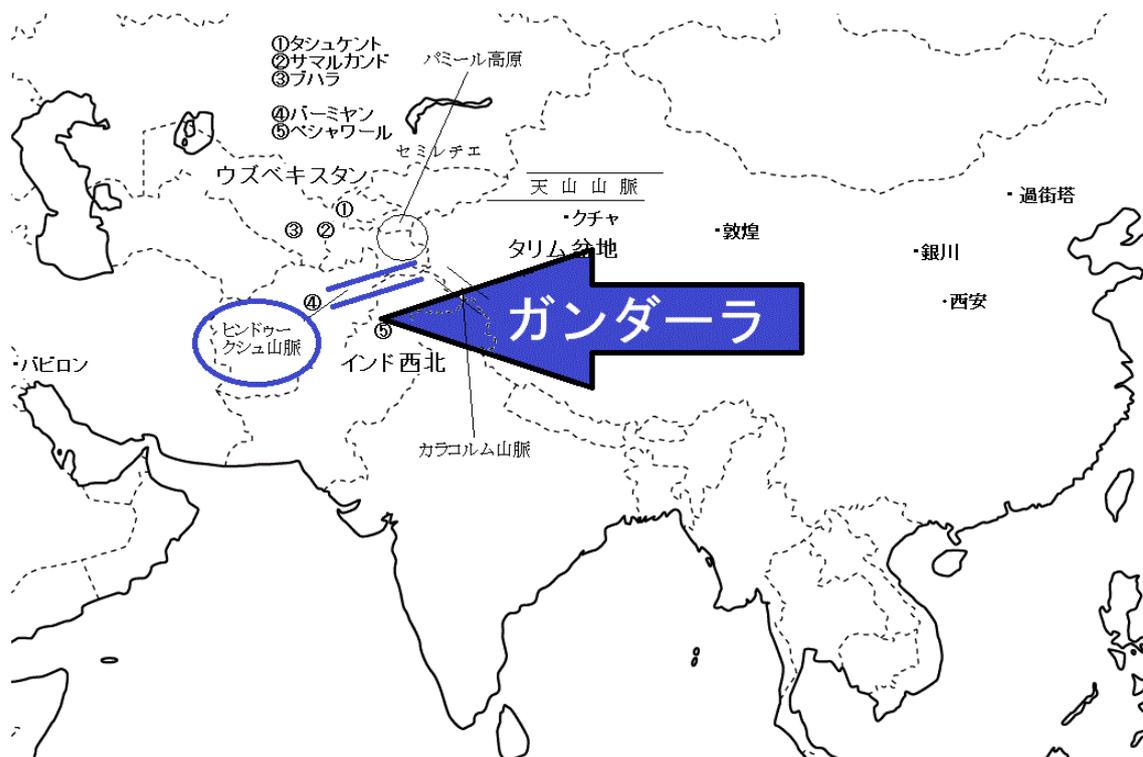
2. クシャン朝の王統と『後漢書』の記述

ヒンドークシュ山脈以北に興った遊牧民クシャン族は山脈以南のガンダーラ地方に進出しインド西北の地を中心として栄えた。いわゆるクシャン朝（現在のパキスタン一帯に相当する）である。クシャン朝の創始者はクジュラ・カドフィセス（在位後60-100年）とされ、『後漢書』卷八十八「西域傳」につぎのようにある。人名の漢字音写の読みは、歴史学の慣用にはよらず、呉音によることにする。

貴霜（クシャン）の翽侯（きゅうこう。部族長）たる丘就卻（くじゅかく。クジュラ・カドフィセス）、四翽侯を攻滅し、自ら立ちて王と為し、国を貴霜（クシャン）と号す。安息（アルサケス朝パルティア）を侵し、高附の地を取る。又、濮達、罽賓を滅し、悉く其の国を有す。丘就卻（くじゅかく。クジュラ・

カドフィセス) 年八十余にて死し、子たる閻膏珍 (えんこうちん) 代わりて王と為す。天竺 (インド) を復滅し、將一人を置き之を監領す。

貴霜翽侯丘就卻攻滅四翽侯，自立爲王，國號貴霜。侵安息，取高附地。又滅濮達、罽賓，悉有其國。丘就卻年八十餘死，子閻膏珍代爲王。復滅天竺，置將一人監領之。



丘就卻 (くじゅかく) という漢字音写がクジュラ・カドフィセスに相当することについては特段の異論はないようである。問題は閻膏珍 (えんこうちん) という漢字音写が誰を指すかということである。『後漢書』に、閻膏珍はインドを征服し総督を任命して統治させたとあるから、この人物が誰であるか、小さなことではない。

3. 問題の所在

これまで、丘就卻 (くじゅかく。クジュラ・カドフィセス) の子の閻膏珍 (えんこうちん) は、ヴィマ・カドフィセスであるとされてきた。ヴィマ・カドフィセスについては金貨を含め多量の貨幣が残っている¹。

クジュラはバクトリア地方を平定すると、南下してガンダーラ地方を征服し

¹ Göbl, R. (1984) に貨幣の写真が掲載されている。

た。クジュラが八十余歳で死ぬと、その子のヴィマ・カドフィセスが王位を継いだ。山崎元一 (1997:187) による

しかし1993年に北アフガニスタンのラバータクでギリシア文字バクトリア語の碑文が発見された。このラバータク碑文の読解は、Sims-Williams, N. & J. Cribb(1996)およびSims-Williams, N. 講演・熊本 裕訳(1997)により公表された。それによると、クシャン朝の王統は、クジュラ・カドフィセス Kujula Kadphises (曾祖父)、ヴィマ・タクトゥ Vima Taktu (祖父)、ヴィマ・カドフィセス Vima Kadphises (父)、カニシカ Kanishka (子)であり、クジュラ・カドフィセスとヴィマ・カドフィセスの間にヴィマ・タクトゥがいるという。以下はSims-Williams, N. & J. Cribb(1996)による当該碑文の12-14行目の読みを、日本語に訳したものである。

そして、これらの諸王(の彫像)を作るよう命じた。曾祖父 Kujula Kadphises 王、祖父 Vema Taktu 王、父 Vema Kadphises 王、そして Kanishka 王自身のために²。

Sims-Williams, N. & J. Cribb(1996)を受けていくつかの立場が表明された。一つは閻膏珍をこれまでのようにヴィマ・カドフィセスとしながら、『後漢書』の記述を補正すべきであるとするものである。

戦乱のつづくアフガニスタンで、1993年、北部のラバタクという遺跡から、偶然、カニシカ王のバクトリア語碑文(約1200字)が発見された。この碑文はクシャン族自らが残した貴重な記録を含んでおり、そのなかにカニシカ王自身が父をヴィマ・カドフィセス、祖父をヴィマ・タクト、曾祖父をクジュラ・カドフィセスと呼んでいる部分がある。『後漢書』の伝えるクシャン王の系譜

² Sims-Williams, N. & J. Cribb(1996)は碑文をギリシア文字の小文字に翻字して示すが、ここではそれを更に古典期ギリシア語の音価に対応するローマ字に翻字し逐語訳を付した。バクトリア語の表記に用いられたギリシア文字を古典期ギリシア語のローマ字によって翻字するのは不適切ではあるが便宜的な措置である。

otēia(そして) phromado(命令した)ab(～のため)eimoano(これらの)shaonano(諸王の)kirdi(作った), abo(～のため)kozoylo(クジュラ)kadphiso(カドフィセス)shao(王)abo(～のため)i(冠詞)phro(大いなる)niago(祖父), odo(そして)abo(～のため)ooēmo(ヴィマ)taktoo(タクトゥ)shao(王)abo(～のため) i(冠詞) niago(祖父), odo(そして)abo(～のため)ooēmo(ヴィマ)kadphiso(カドフィセス) shao(王)abo(～のため) i(冠詞)pida(父), odo(そして)abo(～のため) i(冠詞)khob(自身)so(また) abo(～のため)kanēshko(カニシカ)shao(王)。

に補正の必要が出てきているのである。 小谷仲男(2003:211-213)による

小谷氏の言う“補正”とは、閻膏珍(えんこうちん)をヴィマ・カドフィセスとした上で『後漢書』の記述を見なおすという立場であろう。次に挙げるのはいま一つの立場で、閻膏珍をそのままヴィマ・タクトとするものである。この場合、『後漢書』の記述を補正する必要はない。

『後漢書』には閻膏珍が丘就卻の子であると記されているので、丘就卻をクジュラ・カドフィセスと考える以上、閻膏珍はヴィマ・タクトゥを指すと考えるのが自然であろう。 宮本亮一(2013:60)による

いずれにしても、まず、クジュラ・カドフィセス Kujula Kadphises (曾祖父)、ヴィマ・タクトゥ Vima Taktu (祖父)、ヴィマ・カドフィセス Vima Kadphises (父)の表記すなわち綴りを確認しなければならない。ギリシア文字バクトリア語、カローシュティエー文字ガンダーラ語、ギリシア文字ギリシア語で書かれたものがあり、それぞれに違いがある。次いで、閻膏珍という漢字音写が、ヴィマ・タクトゥ Vima Taktu (祖父)の名前としてふさわしいか、それともヴィマ・カドフィセス Vima Kadphises (父)の名前としてふさわしいかということを検討することになる。

4. ギリシア文字バクトリア語の綴り

Sims-Williams, N. & J. Cribb(1996)に付された碑文の写真はやや不鮮明で、kozoylo(クジュラ)kadphiso(カドフィセス)と ooēmo(ヴィマ)kadphiso(カドフィセス)は確認できるものの、問題となる ooēmo(ヴィマ)taktoo(タクトゥ)は不鮮明で***mo*ak*oo までしか確認できない。*は見えない文字。[]は不鮮明な文字



* *[H] M O * A K [T] O O

その後、Sims-Williams, N. (2008)ではやや鮮明な写真が提供され、それによると*oēmo*ak[t]ooまで確認できる。いま2008年の論文により、三人の王名の綴りを確認すると次のようになる。



K O Z O T Λ O K A Δ Φ I C O ρ A O
kozoylo(クジュラ)kadphiso(カドフィセス)shao(王)



O O H M O * A K [T] O O p A O
 ooēmo(ヴィマ)*ak[t]oo(タクトゥ) shao(王)

Sims-Williams, N. & J. Cribb (1996) の写真にくらべ、Sims-Williams, N. (2008) の写真は明瞭であるが、*ak[t]oo の部分は不鮮明である。この点については次節で別に確認する。



O O H M O K A Δ Φ I C O p A O
 ooēmo(ヴィマ)kadphiso(カドフィセス) shao(王)

以上によると、ヴィマ・タクトゥ以外問題はなさそうである。

5. ヴィマ・タクトゥのギリシア文字バクトリア語の綴り

Sims-Williams, N. & J. Cribb (1996) はラバータク碑文によってカニシカ王に至る王統を明らかにしたわけであるが、その他に、ギリシア文字バクトリア語のダシュテ・ナーウール碑文の模写を紹介する。ダシュテ・ナーウール碑文には系譜上の位置づけが明瞭でない王名が登場する。その碑文の三行目には次のようにあり、ラバータク碑文の王と同一の王とすることができる。模写のとおりであるならば、ooēmotak[t]oo とあるので、両碑文により ooēmo(ヴィマ)tak[t]oo(タクトゥ)とすることができる。

OOH M O T A K [T] O O

O O H M O T A K [T] O O

しかし、tak[t]oo の[t]がやや不鮮明であり、2004年には takzoo とする読みの提案も出た³。この点について、Sims-Williams, N. (2008) は、Bopearachchi, O. (2007) で紹介された新発見のコインの銘文によって解決をする。Bopearachchi, O. (2007)によると、2006年にペシャワールから青銅の壺に蓄えられたコインが発見され、そこにはヴィマ・カドフィセスとカニシカによって発行された4000枚以上の金貨があったという。その金貨のなかに、ヴィマ・カドフィセスが発行したもので、表にギリシア文字ギリシア語で“王ヴィマ・カドフィセス”裏に“クシャン王ヴィマ・タクトゥの息子”とするものがあった。

³ Mitchiner, M. (2004:601) 参照。

貨幣の銘文としてはやや異質であるが、これによりギリシア文字ギリシア語ではあるが“ooēmotakdoy(ヴィマ・タクドウの)”という王名の綴りが確認されたのである⁴。後出の第7節2番目の貨幣写真を参照していただきたい。takdとtaktの違いはあるが、ギリシア文字バクトリア語の綴りをOOHMOTAKTOO(ooēmotaktoo)と復元してよいことになる。

6. カローシュティー文字ガンダーラ語の綴り

クジュラ・カドフィセスの綴りをMitchiner(2004:597)所載の銅貨(1814番)により示す。



11時の位置より反時計回りに、kujula(クジュラ)kasasa(カサの)とある。kasasaの-asaは属格語尾であるから王名はkujula(クジュラ)kasa(カサ)となる。さきに見たバクトリア語はkozoylo(クジュラ)kadphiso(カドフィセス)であるから、ガンダーラ語はkadphisoの-dphi-を表記せずka--soに相当する部分のみを綴ったことになる。次にヴィマ・タクトウを確認する。

ヴィマ・タクトウの綴りは、いまのところ、Sims-Williams, N. & J. Cribb(1996)に掲載されたType6(pp. 140-141)とされる貨幣の銘文に拠るしかない。写真は不鮮明でここに提示しても確認はできないであろうから提示はしない。この貨幣の銘文について、Sims-Williams, N. & J. Cribb(1996)はVema Tak[ta]と復元する。Mitchiner, M. (2004:601)は同一の写真によりTakshuとする。ここで提示できないのは残念であるがSims-Williams, N. & J. Cribb(1996)にあるFig. 14aという写真によると、k+子音という複合文字であることは見て取れる。ここではVema Tak[*]としておく。次にヴィマ・カドフィセスを確認する。

⁴ Boppearachchi, O. (2007)は貨幣一種の模写(p. 43)、貨幣二種の写真(p. 53)を提示するが、写真のほうは小さなもので銘文の確認は容易ではない。貨幣二種の写真のうちの一つは磨滅のため銘文の確認は困難である。その後、Boppearachchi, O. (2012)では二種の貨幣を提示する。こちらはやや大きめの写真で二種ともに銘文の確認が可能である。

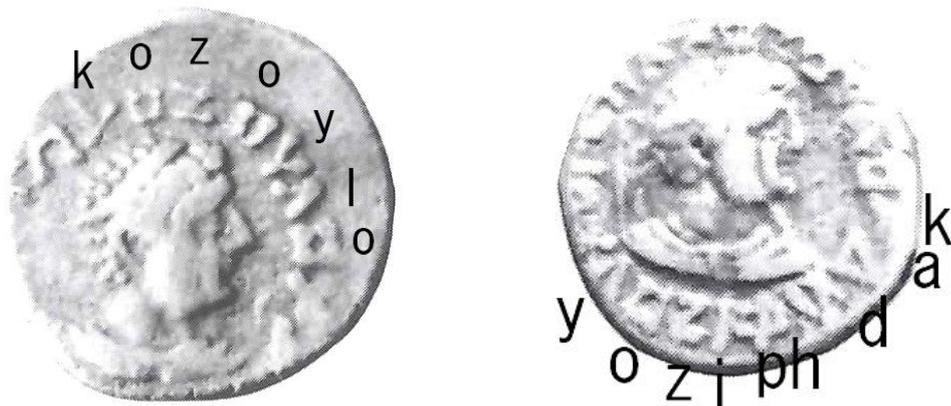
ヴィマ・カドフィセスの綴りを渡邊弘(1973:56)所載の金貨により示す。



3時の位置より反時計回りに、vemakathpiśasaとある。kathpiśasaの-asaは属格形語尾であるから王名は vema(ヴェマ) kathpiśa (カトピイサ)となる。vima(ヴィマ) kathphiśa (カトフィサ)とする文献もあるが、本貨幣によるかぎり viではなく veであり、phiではなく piである。なお、複合文字-thpi-の読みであるが、Glass, A. (2000:132)は、pという文字の縦に下に向かって伸びた線の根もとにある“×”を th とする説を紹介する。thは本来“+”であるが45度傾いているという。これをthとしたのは早くはWhitehead(1914:183)であるらしい。本稿はその説にしたがう。さきに見たバクトリア語は ooēmo(ヴェマ)kadphiso(カドフィセス)であるから、ガンダーラ語の vema(ヴェマ) kathpiśa (カトピイサ)は、ほぼバクトリア語に対応している。この点は、クジュラ・カドフィセスの場合と異なる。

7. ギリシア文字ギリシア語の綴り

クジュラ・カドフィセスの綴りを Mitchiner(2004:597)所載の銅貨 (1811番と1814番)により示す。



左 1811 より kozoylo (クジュラ) 、右 1814 より kadphizoy(カドフィセスの)を読み取ることができる。全体で kozoylo (クジュラ) kadphizoy(カドフィセスの)とある。次にヴィマ・タクトゥを確認する。

ヴィマ・タクトゥの綴りを Bopearachchi, O. (2007) 所載の金貨により示す。



ē のギリシア文字はKと同形で、m のギリシア文字はNと同形となっている。この貨幣以外においてもMをNと記す場合はある。ooēmo(ヴェマ) takdooy (タクトゥの) とある。次にヴィマ・カドフィセスを確認する。

ヴィマ・カドフィセスの綴りを渡邊弘(1973:56) 所載の金貨により示す。



ooēmo(ヴェマ)kadphisēs (カドフィセス) とある。

8. 各種銘文の比較

クジュラ・カドフィセス、ヴィマ・タクトゥ、ヴィマ・カドフィセスのバクト

リア語、ガンダーラ語、ギリシア語の綴りを比較すると次のようになる。

	バクトリア語 碑文	ガンダーラ語 貨幣	ギリシア語 貨幣	漢字音写と 中古音
クジュラ カドフィセス	kozoylo kadphiso	kujula kasasa *-asa 属格語尾	kozoylo kadphizoy *-oy 属格語尾	丘就 k ^h ɿəu, dziəu 卻 k ^h ɿak
ヴィマ タクトゥ	ooēmo taktoo	vema tak[*]	ooēmo takdooy *-oy 属格語尾	閻 yiəm 膏珍 kau, tʃɛn
ヴィマ カドフィセス	ooēmo kadphiso	vema kathpiśasa *-asa 属格語尾	ooēmo kadphisēs	

三言語における王名の綴りをみると、クジュラ・カドフィセスのガンダーラ語の kasa が、バクトリア語で kadphiso とありギリシア語で kadphizo とあるところが異なる。それ以外は大きな違いは認められない。王名の構成であるが、それぞれ二つのまとまりから成ることは明らかである。すなわち、バクトリア語をみると、kozoylo kadphiso と ooēmo kadphiso は kadphiso が同形であり、ooēmo taktoo と ooēmo kadphiso は ooēmo が同形となっている。これによると、それぞれ kozoylo/kadphiso、ooēmo/taktoo、ooēmo/kadphiso という二つの音のまとまりから構成されており、漢字で王名を音写するときに、まず認識する単位であるといつてよいであろう。漢字音写がある場合、いつの時代の漢字音であるかということが問題となる。丘就卻と閻膏珍という漢字音写が出ている『後漢書』の成立は紀元後 5 世紀前半で、南朝宋の范曄（398 年 - 445 年）によって書かれたとされるので、時期的には漢語音韻史でいうと上古音と中古音の過渡期にあたる。もっとも、漢字音写自体は後漢時代にできていて、それが伝わったとすると、晩期上古音の時期にあたる。そこで、とりあえず上古音と中古音を提示し、もしも過渡期の音として修正が必要となる場合は修正することにした。なお、上古音と中古音を関連付けて、その両者を併記した文献は幾つかあるが、本稿は歴史学の研究者にとって利用しやすく学術的な批判にも耐えうるという点から藤堂明保著『学研 漢和大字典』（1978 年の初版）の上古音と中古音によることにする。

9. 漢字音写「丘就卻」の検討

藤堂明保(1978)により、クジュラ・カドフィセスの漢字音写である丘就卻の

上古音と中古音をみると次のとおりである。便宜のため表記を変えた部分がある。また、説明において、王名の綴りはバクトリア語の綴りを用いることにするが、漢字音写はバクトリア語によったと結論づけているわけではなく、説明の便宜のためである。

上古音 丘 k^hɿuəŋ 就 dziog 卻 k^hɿak

中古音 丘 k^hɿəu 就 dziəu 卻 k^hɿak

さてクジュラ・カドフィセスの場合、kozoylo/kadphiso の kozoylo の ko に丘 (中古 k^hɿəu、上古 k^hɿuəŋ) を当て、zoy に就 (中古 dziəu、上古 dziog) を当て、lo に相当する部分は省略する。kadphiso の ka に卻 (中古、上古ともに k^hɿak) を当て、dphiso に相当する部分は省略する。漢字音の介音 (半母音) の -i- とやや緩んだ -r- は音写には利用されず、主母音が利用されているようで、漢字の主母音と原音はそれほど遠くないように見える。なお、Sims-Williams, N. & J. Cribb (1996:102) は、kadphiso の ka に卻のみを対応させる音写について、誤写とみているようであるが根拠は示さない⁵。kadphiso の dphiso を表記しないのは不完全と考えたのであろうが、そうとも言い切れない。どういうことかというところ、ガンダーラ語はこの王名を kujula/kasa とするわけであるが、kasa のような音形に卻を当てたとも考えられる。この音写で大事な点は、kozoylo/kadphiso であろうと、また kujula/kasa であろうと、いずれにしても音のまとまりの最初の部分である ko もしくは ku と、ka は省略することなく音写しているということである。この点は、次に検討する閻膏珍の音写の仕方と関係があるのでおさえておきたい。なお全体として、漢語中古音で解釈をして大きな問題はなさそうである。

10. 漢字音写「閻膏珍」の検討

ヴィマ・タクトゥもしくはヴィマ・カドフィセスの漢字音写である閻膏珍の上古音と中古音をみると次のとおりである。

上古音 閻 fiam 膏 kog 珍 tien

中古音 閻 yiɛm 膏 kau 珍 ɬiɛn

まず閻膏珍がヴィマ・タクトゥの漢字音写であると仮定して検討する。ooēmo/taktoo の ooēmo に閻 (中古 yiɛm、上古 fiam) を当てる。吉田豊 (1992:113-114) によるとバクトリア語の文字 o は、語頭で /w/、語末や複合語のそれぞれ末尾で /ə/ を表わすという。そうであるならば、ooēmo には wem(ə) のような音を想定できる。音写字の閻は、漢語音韻学でいう「喻母四等」字で音節の初頭は柔らかい母音始まりの音とされる。閻の主母音と音節末子音 -m で

⁵ “It is possible to explain the mismatched last syllable of Qiu-jiu-que as a scribal error, ……”

wem(ə)のような音を表記したと理解することができる。問題は taktoo である。taktoo を膏珍で表記したとなると、taktoo の ta は省略し tak の-k に膏(中古 kau、上古 kog)を当て、taktoo の too に珍(中古 *tiěn*、上古 *tien*)を当てたことになる。この音写には二つの不都合がある。一つは、音のまとまりのうちどの音を音写するかという部位の問題である。いま一つは、音写した漢字音の音質が適当であるかという問題である。

ta	-k	too
----	膏(部位の問題)	珍(音質の問題)

音写する部位の問題であるが、先に ko(丘)zoylo/ka(卻)dphiso でみたように、音のまとまりの初頭を音写するのは通常の在り方である。しかるに ooēmo/taktoo の場合、taktoo の初頭の ta を表記せず、音節末音-k を表記したことになる。これは部位に関するもので、一つ目の不都合である。

次に音写に使用する漢字音の音質の問題であるが、taktoo の too に珍(中古 *tiěn*、上古 *tien*)を当てたとなると音質が合わない。too の oo が円唇母音[o][u]であったとして、珍の母音には円唇性はなく平唇の比較的狭い母音となるため音質が合わないのである。さらに言うならば、珍は漢語音韻学でいう「知母三等」字で、藤堂明保(1978)はその初頭子音を cerebral の *t̚* とするが、palatal の *t̚* とする説もある⁶。palatal な *t̚* であったとすると、[to][tu]の聴覚印象からは遠ざかる。また、藤堂明保(1978)は珍の介音(半母音)をやや緩んだ-ɪ とするが、-i-であったとする説もある⁷。-i-であったとすると、[to][tu]の聴覚印象からは遠ざかる。これは音質に関するもので、二つ目の不都合である。

なお、Sims-Williams, N. & J. Cribb(1996:102)は、閻膏珍の膏珍の部分はヴィマ・タクトゥの未だ知られていない名前か称号を表わしているのではないかとする⁸。タクトゥの音写として膏珍に問題があることを認識した上で述べたものであろうが、それを架空の名前もしくは称号に託して解決を求めるのはいかなものであろうか。

次に閻膏珍がヴィマ・カドフィセスの漢字音写であると仮定して検討する。ooēmo/kadphiso の ooēmo に閻を当てることについては先に検討した。kadphiso の ka に膏(中古 kau、上古 kog)を当て、kad の-d に珍(中古 *tiěn*、上古 *tien*)を

⁶ 高本漢(1940)。

⁷ 知母三等字の介音を-ɪ とする説、-i- とする説、両者の中間とする説がある。中村雅之(1992)参照。

⁸ “It is possible to explain the mismatched last syllable of Qiu-jiu-que as a scribal error, but the last two syllables of Yen-gao-zhen seem to represent an as yet unknown name or title of Vima I Tak[to].”

当て、phiso は省略したことになる。

ka	-d	phises
膏	珍（音質の問題）	----

-dに珍を当てるわけであるが、音質に問題はないのかとの意見があろう。-dを表記するための候補はいくらでもある。地名の音写である濮達の達（中古 dat）でも良いし、鼻音韻尾-nを持たない知（中古 tʰɛ̃）でも良かったはずである。わざわざ鼻音韻尾-nを持つ音節を使用したのはなぜか。それは珍がもつ意味を利用したのである。クジュラ・カドフィセスを表わす丘就卻は意味を考慮せず漢字音のみを利用した音写であり味もそっけもない。多くの漢字音写はこのようなものであるが、ときに音と意味の両者を考慮したものがある。閻膏珍がそれである。閻は門の意味であるが“姓”としても用いられる。“名”に相当する膏珍の膏であるが、膏田というときよく肥えた田地、膏雨というとき慈雨であり、肥えたとか恵みという意味を持つ。珍は宝である。膏珍とすると、恵みの宝もしくは豊富な宝ともなろうか。閻膏珍は姓と名の構造ともなっており良く練られた漢字音写形といえよう。鼻音韻尾-nを持つ音節の珍を使用することになったのは、音と意味の両者を考慮して漢字を選んだ結果と考えたい。バクトリア人が自国の王に対して美名の漢字音写形を作るということであるならば、それは自然なことであるが、おそらくそうではないであろう。閻膏珍は漢人によって作られたものであろうから、その対象となる人物に美名を付すという扱いはした何らかの理由があったはずである。以上を可とするならば、ヴィマ・カドフィセスを閻膏珍とすることに特段の問題は認められない。なお全体として、漢語中古音で解釈をして大きな問題はなさそうである。

11. おわりに

閻膏珍が、もしもヴィマ・タクトゥという名の漢字音写であるとする、音写する部位と、使用する漢字音の音質の両者に不都合が生ずる。いっぽう、閻膏珍がヴィマ・カドフィセスという名の漢字音写であるとする、特段の不都合は認められない。このことより閻膏珍を、ヴィマ・カドフィセスという名を音写したものとみることができる。そうであるならば、ラバータク碑文で丘就卻（クジュラ・カドフィセス）の子はヴィマ・タクトゥと確認できるにもかかわらず、『後漢書』西域伝には丘就卻（クジュラ・カドフィセス）の子は閻膏珍（ヴィマ・カドフィセス）とあり、両者に齟齬が生ずる。『後漢書』西域伝に何らかの補正を加えなければならない。問題は、『後漢書』に、閻膏珍の事績としてインドを征服し総督を任命して統治させたとある。このような事績を残した人

物がだれであったか、ヴィマ・タクトゥであったのかそれともヴィマ・カドフィセスであったのかということである。もしもヴィマ・タクトゥであるならば、『後漢書』西域伝の著者は、ヴィマ・タクトゥの漢字音写を使うべきところ、誤解をしてヴィマ・カドフィセスを示す閻膏珍を使ったことになる。他方、インドを征服し総督を任命して統治させたという事績をヴィマ・カドフィセスに帰することができるならば、“丘就卻の子”という『後漢書』の表現が誤解に基づくことになる。いずれにしても、閻膏珍という漢字音写自体はヴィマ・カドフィセスの名を指しており、それが議論の出発点となるということを示したつもりである。

【参考文献（発行年順）】

- Whitehead, R. B. (1914) *Catalogue of coins in the Panjab Museum, Lahore*. Vol. 1 *Indo-Greek coins*, Clarendon Press.
- 高本漢(1940), 趙元任、羅常培、李方桂訳『中国音韻学研究』長沙: 商務印書館。
- 有坂秀世(1955)『上代音韻攷』三省堂。
- 田中美知太郎、松平千秋(1970)『ギリシア語入門 改訂版』岩波書店。もと1951年。
- 渡邊 弘(1973)『西域の古代貨幣』学習研究社。
- 藤堂明保(1978)『学研 漢和大事典』学習研究社。
- Göbl, R. (1984) *System und Chronologie der Münzprägung des Kušānreiches*. Wien, 1984.
- 中村雅之(1992)「中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって」『富山大学人文学部紀要』18:89-104。
- 前田耕作(1992)『バクトリア王国の興亡』(レグルス文庫)第三文明社。
- 吉田 豊(1992)「バクトリア語」, 『言語学大辞典 第3巻 世界言語編(下-1)』三省堂, 111-115頁。
- 水野弘元(1994)『パーリ語辞典(二訂版)』春秋社。
- Sims-Williams, N. & J. Cribb (1996) “A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great”, *Silk Road Art and Archaeology* 4, 75-142.
- N. Sims-Williams, N.、熊本 裕訳(1997)“古代アフガニスタンにおける新知見- ヒンドゥークシュ北部出土のバクトリア語文書を中心に -” 講演の翻訳。
http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/hkum/bactri_j.html
- 山崎元一(1997)『世界の歴史3 古代インドの文明と社会』中央公論社。
- アンドリュー・バーネット著/新井佑造訳(1998)『大英博物館双書⑥古代を解き明かす コインの考古学』学芸書林。
- Glass, A. (2000) *A Preliminary Study of Kharoṣṭhī Manuscript Paleography*. web上に公開されている。(http://depts.washington.edu/ebmp/downloads/Glass_2000.pdf)

- グプタ, P. L. 著、山崎元一他訳(2001)『インド貨幣史 一古代から現代まで』刀水書房。
- 小谷仲男(2003)「クシャン族とガンダーラ仏教」, 『NHKスペシャル文明の道 ②ヘレニズムと仏教』日本放送出版協会, 200-225 頁。
- Mitchiner, M. (2004) *Ancient trade and early coinage Volume one*. London: Hawkins Publications.
- Bopearachchi, O. (2007) “Some Observations on the chronology of the early Kushans” in: Gyselen, R. (ed.) *Des Indo-Grecs aux Sassanides : Données pour l’histoire et la Géographie Historique*, 41-53.
- Sims-Williams, N. (2008) “The Bactrian Inscription of Rabatak : A New Reading” , *Bulletin of the Asia Institute* Volume 18, 53-68.
- Bopearachchi, O. (2012) “Chronology of the Early Kushans: New Evidence” in: Jayaswal, V. (ed.) *Glory of the Kushans. Recent Discoveries and Interpretations*, New Delhi, 123-136.
- 宮本亮一(2013)『バクトリア史研究』龍谷大学大学院文学研究科博士論文。